

こんにちは♪ 先日「本屋大賞」のノミネート作の発表がありましたので、紹介します。本屋大賞というのは、全国の書店員がいちばん売りたい本を選ぶ賞で、エンターテインメント小説の賞としてはかなり信頼できる賞になっています。ちなみにこれまでの受賞作は、小川洋子『博士の愛した数式』、恩田陸『夜のピクニック』、リリー・フランキー『東京タワー』、佐藤多佳子『一瞬の風になれ』、伊坂幸太郎『ゴールデンランバー』、濱かなえ『告白』、冲方丁『天地明察』、東川篤哉『謎解きはディナーのあとで』、三浦しをん『舟を編む』、百田尚樹『海賊とよばれた男』、上橋菜穂子『鹿の王』、宮下奈都『羊と鋼の森』、恩田陸『蜜蜂と遠雷』、辻村深月『かがみの孤城』、瀬尾まいこ『そして、バトンは渡された』、凧良ゆう『流浪の月』、町田そのこ『52ヘルツのクジラたち』、逢坂冬馬『同志少女よ、敵を撃て』、凧良ゆう『汝、星のごとく』、宮島未奈『成瀬は天下を取りに行く』！ 本が好きなひとは「うんうん」でしょうか？ さて、今回はどの作品が選ばれますか。今号では、ノミネートされた 10 作品のうち、オススメの本をセレクトして紹介します。ハズレなしだよ！「面白い本」はここに！

## 「本屋大賞」ノミネート作！

### 『死んだ山田と教室』 金子玲介 講談社

「死んでんすね、俺」。「ブランチ BOOK 大賞」受賞作！<sup>すこうあらき</sup> ちなみに表紙は、菅田将暉の弟のこっちのけんとの弟の菅生新樹です！ 山田が死んだ。あのマジでおもしろくって、本当に性格よくって、人気者だった山田が。誰もが2年E組の中心だと思っていた、あの山田が。ねこを助けようとして、飲酒運転の車に轢かれて死んでしまったのだ。「山田が亡くなり、クラスにぼっかり穴が開いてしまったようです」。夏休みが終わって、山田のいない初めての授業、いちばん賑やかなクラスだった2年E組は、まるでお通夜の続きのようで授業にならないので、担任が急遽授業をホームルームに変えて席替えをすることにした。沈黙が続いた。「いや、いくら男子校の席替えだからって盛り下がりがすぎだろ」。山田の声だ！ 教室のスピーカーから山田の声がする。驚くべきことに会話もできるのだ。山田は生き返った？ 理屈はまったくわかんないけれど、スピーカーへと生まれ変わった？ こうして声だけになりながらも山田がいることで、2年E組はいつものノリを取り戻したのだった。しょーもない男子高校生の日々は再び続いていくのだが、やがて…。

### 『生殖記』 朝井リョウ 小学館

紀伊國屋書店スタッフが全力でおすすめる「キノベス！」で、見事第1位に選ばれました！ かつて誰も書いたことのない、●●●を語り手にした衝撃作！ 「ヒトは二回目ですが、オス個体は初めてです。よろしくお願いします」。その前代未聞の語り手が語るのが、家電メーカー総務部勤務の三十過ぎのサラリーマンである尚成。彼は女性にまったく興味のないゲイで、一人称を「私」で話します。カミングアウトするなんてとんでもない、ゲイであることをひた隠しにし、“絶対にバレてはいけない”と感じています。それがゆえに、小さなころから自分を共同体の一員に非常にうまく擬態している。そんな尚成を語り手がユーモラスに描写していくのです。かつては、たとえば体育館のマットをみんなで運ぶとき、尚成も腕にしっかり力を込めて運んでいました。ところが、今ではまったく腕に力を入れていない。それっぽく振る舞っているだけなんです。これは、マットに限らず、自分が所属している共同体を皆で前に進めようとしているときでも、“自分もそれを運ぶための一員だ”みたいな気持ちを持ち合わせていないのです。何にも考えていず、大きな流れに身を任せ、空気を読む能力だけに長けています。「手は添えて、だけど力は込めず。これが、今の尚成の“しっくり”です」。しっくりが第一の彼にとって幸福とは何なのでしょう？

### 『小説』 野崎まど 講談社

「キノベス！」第3位！ 「本を読んでいるだけではダメなの？」という問いに答えてくれる本！ 5歳のときに『走れメロス』を読んで小説に目覚めた内海修司は、貪るように本を読むようになった。一家が引っ越ししたことは、彼の読書生活をより加速させ、友だちなどひとりもできなかった。ところが小6になって、生涯の友・外崎と図書館で出会う。司馬遼太郎の『龍馬がゆく』の3巻を読んでいたところ、「面白いの」と尋ねるので、1巻を貸してみたところ、すっかりハマってしまったのだった。実はそれまで外崎は本を読んだことがなかったのだった。小説の面白さを共有できるようになった二人は、学校の敷地のすぐとなりの鬱蒼と庭木の茂る古びた大きな屋敷、通称モジャ屋敷に小説家が住んでいることを知り、そこに忍びこもうと試みる。そこには学校の図書室に負けないくらいたくさん本があり、作家先生は「自由に読んでくれていい。勝手に入ってくれてかまわない」と夢のような提案をするのだった。二人はそこで毎日、本を読んで過ごすことに。ところが、やがて、「読んでだけいたい」内海と「書きたい」外崎は道を違えることになる…。

### 『恋とか愛とかやさしさなら』 一穂ミチ 小学館

『ツミデミック』で直木賞受賞1作目！「プロポーズされた翌日、恋人が盗撮で捕まった」。まだ半人前ながら親友の結婚式のカメラマンの大役を務めた新夏は、別の用事を済ませ、写真の整理のために帰ろうとしていたところ、二次会に向かおうとしていた恋人の啓久と東京駅で待ち合わせをすることに。駅前の広場で結婚式の前撮りをしているカップルが2・3組いるので、東京ステーションホテルで式を挙げないと撮影できないことを啓久に教えると、いきなり「ここで前撮りは無理だけど、俺と結婚してくれる？」とプロポーズされた。同僚の結婚式の高揚感か、見知らぬ裕福なカップルに当てられたのか。それでも、幸せかも、と臆面なく思えるほどにはうれしかったのだ。その翌日にすべてを台無しにするような知らせを耳にするまでは。なんと、よりもよってその翌日の通勤電車で啓久は女子高生のスカートの中を盗撮して捕まっていた！男ってそういうものなのだろうか？新夏はまったく理解ができなかった…。「恋とか愛とかやさしさなら、打算や疑いを含んでいて当然で、無垢に捧げすぎれば、ときに愚かだ幼稚だと批判される。なのに『信じる』という行為はひたすらに純度を求められる。一度でも、わずかでも損なわれたら、二度と元には戻らない」。前々回にノミネートされ、シスターフッド小説であるのに島清恋愛文学賞を受賞した『光のところにいてね』も忘れがたい作品でしたよね。

### 『アルプス席の母』 早見和真 小学館

「アルプス席の母に、いいところを見せてあげたかったんです」。「すべてのきっかけは、お母さんの期待に応えたいっていう思いからだっと思います」。みなさんが部活を続けるために、お母さんがどんなにがんばっているか、ご存知でしょうか？名著『ひゃくはち』で高校野球を補欠選手の視点から描きだした著者の新作は、高校野球児ではなくそのお母さんが主人公です！息子・航太郎が9歳のときに事故で夫を亡くしている菜々子は、看護師として働きながら、家のこともすべてこなしながら、息子の野球を支えている。中学生の航太郎は神奈川県シニアリーグでエースとして活躍し、全国大会で優勝までしてみせるが、憧れの大阪の甲子園常連校・山藤にスカウトされることはかなわず、特別特待生枠で入学できる同じ大阪の新興私立高へと進学する。航太郎は大阪で寮生活をするようになるが、菜々子もまた仕事を辞め大阪で新しい生活を始めることに決める。航太郎は山藤を破って甲子園へと行けるのだろうか。「おかん」と呼ぶことを禁ずる菜々子は、高校球児の母親として奮起する…。

### 『spring』 恩田 陸 筑摩書房

ピアノコンクールの頂上決戦を描き、史上初の直木賞&本屋大賞をW受賞した『蜜蜂と遠雷』から七年半！ 今作のテーマはバレエ！ バレエが、「今まで描いた主人公のなかで、これほど萌えたのは初めてです」と恩田<sup>よすはる</sup>さんが明言してるほど魅力的な主人公をもって描かれます！ 萬春。無二の舞踏家で、自ら斬新な振付も行う。「HAL」と綴るのは、名前の由来が映画『2001年宇宙の旅』で宇宙船で人間と敵対するコンピューターの名前だから。名前の意味を尋ねられた彼は、英語で「ten thousand spring」と答えた。一万もの春を持っている男。8歳で川べりをくるくる回りながら歩いていて「回りすぎた」ところを、偶然通りがかったクラシックバレエの指導者の目に止まり、「踊る人」だと確信した彼女に1からバレエを教えられた。ドイツの名門のバレエ学校のワークショップに参加すれば、その中性的な美しさと独特の雰囲気と凶抜けたテクニックでたちまち注目され、「自由に踊って」という課題には「作品」になるような振付で応えてみせる。彼がいつも周りを見て考え込んでいるように見えるのは、「この世のカタチ」を見ているのだそうだ。王子様役にうってつけな生徒が学校から参加したときには、なんと『眠れる森の美女』のオーロラ姫を踊って、「ザ・王子」に手を取って踊らせた。そして、15歳で彼は海を渡り、その学校へと留学することになる。さあ、語り草になるのはこれからだ…。

### 『成瀬は信じた道をいく』 宮島未奈 新潮社

さて、史上初の本屋大賞2年連続受賞なりますか!? デビュー作『成瀬は天下を取りにいく』がランキングを席卷し、本屋大賞まで受賞の、なんと16冠！ まさしく天下を取ってしまったわけですが、今作も成瀬が活躍するその続編！ で、その本作が、またまた雑誌「ダ・ヴィンチ」のブック・オブ・ザ・イヤーを2年連続で獲得してしまったのです！ あえて例を挙げる必要もないと思うのですが、人気作品の続編ってパワーダウンすることが多いじゃないですか。インパクトも弱くなるし。でも、かつてなく最高な愛されキャラである成瀬は、軽々とその偉業を達成してしまったのでした！ 成瀬と島崎のお笑いコンビ「ゼゼカラ」に憧れる小学生、成瀬を心配するお父さん、クレーマー主婦（成瀬はスーパーでバイトしていた！）、びわ湖大津観光大使を成瀬とともに務める大学生…。盛りだくさんです！ 前作を気に入ったひとなら、絶対に満足できると思います。でも、はたして本屋大賞を続けて2度取ることができるほど、再び多くの人を魅了できたでしょうか？ 成瀬は信じた道をいくのです。